



古村 真美 (こむら まなみ) みなみ野中 1年生

作品名:「永遠の0を読んで」

図 書:永遠の0

「娘に会うまでは死ねない、妻との約束を守るために。」

この言葉は、最大時速 518 キロ、航続距離 2200 キロの零戦に自ら乗り命を落とした一人の男の言葉である。その男の名は、宮部久蔵。

終戦から 60 年目の夏、宮部久蔵の孫の健太郎は死んだ祖父の生涯を調べていた。健太郎は、祖父の昔の戦友に宮部久蔵の過去を聞いてまわった。聞いて回るうちに、宮部久蔵の人物像が少しずつ浮かび上がってきた。その人物像とは、海軍航空隊一の臆病者で死ぬのを何より恐れていた男。当時の人とすれば、その様な気持ちを持って戦争に挑んでいたとしても、表面上隠しており、宮部久蔵の様に表に出す者はいなかっただろう。

しかし、宮部久蔵の空戦技術は海軍航空隊一とも言えるほど素晴らしい技術の持ち主だった。その空戦技術を持ち、臆病者であった宮部久蔵は同じ航空隊員から一目置かれていた。

そんな、生きて帰るという意志をつらぬいてきた宮部久蔵がなぜ最終的に特攻隊に自ら志願したのだろうか。

読み進めれば進める程、宮部久蔵の真の姿が少しずつ浮かび上がってくる。生きて帰ると心に決めた宮部久蔵は決して戦争から逃げようとしたのではない。彼は、戦争としっかり向き合っ、生きて帰ることを決意した。周囲からどう見られようと、どう思われようと構わない。生きて帰るという意志をつらぬき通す宮部久蔵の行動は死ぬ事を覚悟して戦場にいる者達にとっては、とても不快な行動であっただろう。しかし、周りの目など気にせず戦争としっかり向き合い、生きて帰ると決めた宮部久蔵だからこそ、特攻隊まで志願したのだと思う。

そんな、宮部久蔵を慕う者もいれば陰口をたたく者もいた。

では、なぜ臆病者であり死ぬ事を恐れていたとされる宮部久蔵を慕う者がいたのだろうか。

それは、宮部久蔵の人間性にあるのではないのだろうか。彼を慕う者の中に、戦友が訓練で亡くなりその人の事を中尉がけなしていた時、宮部久蔵は中尉に向かいまわっているとはわかった。戦友の名誉を守った宮部久蔵に心から感謝し、慕う者が増えたのはまちがいがなかった。

もし、そこに私がいたとして彼の様に勇敢に目上の者にまちがいを指摘できた

ろうか。私は、できなかつたと思う。

臆病者というレッテルをはられた宮部久蔵は、実際は臆病者なんかではなく、正直者だったことがひしひしと伝わった出来事だった。

この様に、宮部久蔵の事を慕う者の中には命を救われた者がたくさんいた。宮部久蔵の一生の中で私が一番心を打たれた出来事は、彼が特攻隊に行く寸前のことだ。

彼の乗るはずだった零戦と他の搭乗員の零戦を交換したのだ。彼は自ら零戦を交換してくれと申し出た。搭乗員は、自分の零戦よりよいランクの零戦を手に行っている熟練搭乗員の彼に言われたが、断固として拒否した。

しかし、彼が何度もたのみに来るため折れて、零戦を交換した。交換した零戦に乗り、二人は出撃した。出撃してまもなく搭乗員は、エンジントラブルのため不時着して、特攻隊として死なずにすんだ。そして、零戦から降りた搭乗員は、驚く物を目にした。それは、「もし、大石少尉がこの戦争を運良く生き残ったら、お願いがあります。私の家族が路頭に迷い、苦しんでいたなら、助けて欲しい」と書かれた紙だった。その後、宮部久蔵は特攻隊として亡くなったと知らされた。

なぜ、宮部久蔵は零戦を交換したのだろうか。それは、宮部久蔵が乗るはずの零戦にエンジントラブルがあることを知っていて、大石少尉と零戦を交換したのだ。この零戦に乗れば助かるかもしれないという蛛の糸を自ら選ばず大石少尉にたくしたのだ。私は、彼が本当の優しさと強さをかねそなえた真の心のもち主だと思う。

この本を読んで大切な事とは何か、考え直すことができた。この本は、戦争の痛々しさを伝えつつ、人の心の内を考えさせる様な素晴らしい本だった。戦争というおそろしく、人のことなど考えてはられない時に人のことを思い自らの死を受け入れた宮部久蔵は亡くなった後にたくさんの人から感謝された。

私は戦争という惨い出来事があったことは、歴史上から消せないが、その様な出来事を二度とくり返さぬように、そして宮部久蔵の様に人のために何かを出来る人になり、自分の意志と信念を大切に生きていきたい。